

## ライフコース研究におけるコウホートと世代

森岡清美

### 一、ライフサイクルからライフコースへ

本年（一九八九）の日本社会学会大会には、ライフコースの語を題名に用いた報告が六点あり、そのためライフコースと題する部会さえ置かれた。ところが九年前の一九八〇年の大会には、ライフコースの語を冠した報告は一点もなく、その代わり、家族周期の語を題名に含む報告が二点みられた。家族周期とは家族のライフサイクルのことであるから、ここにも、社会学者、とくに家族社会学者の関心が、一九八〇年代にライフサイクルからライフコースへ移

ってきたことがわかるのである。いま比較のためにとくに一九八〇年を取り上げたのは、この年の後半、日本の家族社会学者の一団が日米協同研究を場として、ライフコースの概念と初めて、かつ大がかりに出会ったからである。その年九月の日本社会学会大会の発表題目にこの語がまだ登場していないのは、当然のことであった。

ライフサイクルのライフ、ライフコースのライフとは、生命であり、生活であり、生涯でもある。そこにサイクルとかコースという時間の推移を示す語が付いているのであるから、生命をもつもの、少なくとも生活の主体であるものについて、その生涯の全部もしくは一部を観察するとい

ライフサイクル (家族社会学)

年次	海外	日本
1901	Rowntree,B.S., <i>Poverty: A Study of Town Life.</i> (英)	
1923	Tschajanow,A., <i>Die Lehre von der bäuerlichen Wirtschaft.</i> (原典は露)	
1928		
1931	Sorokin, P.A., et al. (eds.), <i>A Systematic Source Book in Rural Sociology</i> , Vol. 2.	
1936	Loomis,C.P., The study of the life cycle of families, <i>Rural Sociology</i> , 1.	
1940	鈴木栄太郎『日本農村社会学原理』	
1946	Glick,P.C., The family cycle. ASA大会報告 (1947, ASR, 12:2に掲載)	
1948	Committee on Dynamics of Family Interaction, 小山隆「日本近代家族」 National Conference on Family Life, Wash.,D.C.	
1959	小山隆「家族形態の周期的変化」	
1960		
1965	Glick,P.C. & R.Parke., Jr., New approaches in studying the life cycle of the family, <i>Demography</i> , 2. 9th International Seminar on Family Research, Tokyo	
1970	Hill,R., <i>Family Development in Three Generations.</i>	
1973	13th International Seminar on Family Research, Paris ( <i>The Family Life Cycle in European Societies</i> , 1977)	森岡清美 『家族周期論』
1974		
1977	森岡編『現代家族のライフサイクル』	
1980		
1981		
1982		
1985		
1987		

ライフコース（年齢社会学）

年次	海外	日本
1901		
1923		
1928	Mannheim,K., Das Problem der Generation, <i>Kölner Vierteljahreshefte für Soziologie</i> , 7.	
1931		
1936		
1940		
1946		
1948		
1959	Ryder,N.B., The cohort as a concept in the study of social change. ASA大会報告（1965, ASR, 30:6に掲載）	
1960		橋川文三「歴史と世代」
1965		
1970		
1973		
1974	Elder,G.H., Jr., <i>Children of the Great Depression</i> .	
1977		
1980	Plath,D.W., <i>Long Engagements: Maturity in Modern Japan</i> . 「家族とライフコースに関する日米比較研究」開始	
1981	Hogan,D.P., <i>Transitions and Social Change: The Early Lives of American Men</i> .	
1982	Hareven,T.K., <i>Family Time and Industrial Time</i> .	
1985		森岡・青井編『ライフコースと世代』
1987	Riley,M.W., On the significance of age in sociology, ASR, 52:1. 森岡・青井編『現代日本人のライフコース』	

う視点が、これらの合成語に表明されていることは明らかである。ある時点での一回きりの観察ではなく、継続的な観察、もしくは反復的な観察を、生体もしくは生活体になんとして試みるという、共通の視点がそこに表明されている。

それでは、ライフサイクルとライフコースと、どこがどう違うのだろうか。この点の理解のためには、まずライフサイクルについて若干の説明をして置かなければならない。

ライフサイクルは動植物について早くから指摘され、生活環境あるいは生活史の見出しのもとに、高等学校の生物の教科書にも登場している。われわれが問題にするのはもちろん人間のライフサイクル、つまり、人間の一生の生活にみられる規則的な繰り返し現象である。社会学の流れのなかでは、ライフサイクルはおおむね家族のライフサイクルとして、一九世紀の末、二〇世紀の初頭以来研究され、とくに一九三〇年代から、アメリカの農村社会学を中心に数多くの業績を生み出した。日本では、アメリカの農村社会学者ソローキン(Sorokin, Pitrim A.)やライブリー(Lively, C. E.)らの影響のもとに、鈴木栄太郎氏が早くも戦時中に

農村家族の経済的浮沈についてのシミュレーション的考察を発表している(「一九四〇ほか」)。第二次大戦直後、鈴木氏の研究とアメリカの人口学者グリック(Glick, Paul C.)の最新の研究(「一九四七」)を素材とする小山隆氏の考察が、公けにされた(「一九四八」)。小山氏は、後に宗門人別改帳を資料として家族形態の周期的変化にかんする歴史人口学的研究を発表し、実証的なライフサイクル研究の先鞭をつけた(「一九五九」)。私も一六年ほど前に、この領域の研究を集大成することを試みている(「一九七三」)。

これにたいして、ライフコースの語がアメリカの社会学者の間で定着したのは、一九七〇年代の後半に入ってからのことである。ライフコースの定義を、この方面の研究の先駆者であるとともに卓越した指導者であるエルダー(Elder, Glen H., Jr.)によって言えば、個人が年齢相応の役割と出来事を経験しつつたどる人生行路、ということになる<sup>(1)</sup>。とりあえず、このくらいの子備的理解でつぎに進みたい。

## 二、ライフサイクルとライフコースの相違点

ライフサイクルもライフコースも、さきに述べたように、ともに個人や家族の時系列的観察を指向する。のみならず、時系列的観察の方法として、結婚、第一子出生、末子出生、第一子結婚、末子結婚、夫の退職、夫婦の死亡など、個人の生涯における、また家族の生活史での重要な出来事(events)に注目する点でも共通するのである。では、この二つの類似したアプローチは、どこでどう相違するのであるのか。

ライフサイクルのアプローチは、これらの出来事を契機として家族が一つの段階からつぎの段階へと移行するとみる。アメリカでのライフサイクル研究の開祖ともいえるべきソローキン<sup>1</sup>は、夫婦の結婚によって農場家族の第一段階が始まり、第一子出生によって家族は第二段階に進み、子どもが働き始めると第三段階に入り、子どもが結婚して独立すると第四段階に移行するとみた(一九三二)。第二次大戦後、ライフサイクルの研究は都市家族に広く適用されるようになり、段階の刻み方も五段階、六、七、八、九段階

と小刻みになっていったが、家族史上の出来事に着目して段階を刻むという発想は一貫している、とみて差し支えない。注目すべきことは、ライフサイクル研究の特色、そして限界として指摘される性格が、出来事によって段階を区分する技法と密接に関連していることである。

他方ライフコースのアプローチは、出来事の時点、つまりタイミングに注目する。そしてこれを年齢でとらえ、例えば結婚という出来事を経験する年齢が、年配のコウホートに属する人々と若いコウホートに属する人々とでどう違っているか、また、同じコウホートに属する人々でもA地方とB地方とで、あるいは高学歴者と低学歴者とでどう違うか、を問題とするのである。このように、ライフコースの研究はコウホートを手がかりとする(同じ年、あるいは同じ時間の幅のなかで生まれた人々をさして、コウホートという)。二〇歳から六五歳の三三、五〇〇人を超える男子を対象としたホガン(Hogan, Dennis P.)の例(一九八二)にみるように、統計的なライフコース研究の場合はコウホート分析が不可欠である。また、邦訳『日本人の生き方』にまとめられたプラース(Plath, David W.)の研究(一九八〇)のように事例調査にもとづく場合でも、およそライフコース

研究を志向する限り、調査対象を一定のコウホートに限定するのが常道である。そして、対象を一定のコウホートに限定するという技法上の特色は、ライフコース研究の他の特色と密接不可分の関係にあるのである。

このように、出来事に注目する点は同一でも、ライフサイクル研究では段階の設定と結びつき、ライフコースでは多かれ少なかれコウホート分析と結合する。したがって、ライフサイクルからライフコースへの推移は、研究の単位が家族から個人にしぼられ、これまで軽視された時代環境の規定性がとくに注意されるようになったことだけでなく、調査対象選択のフィルターが、一組の発達段階からコウホートへと推移した側面をもっている。これは従来あまり注意されていないが、頗る重要な事柄といわなければならない。

### 三、ヒルとグリック

日本のライフサイクル研究は、その発端からアメリカのライフサイクル研究から大きな刺激を受けてきた。ところで、第二次大戦後のアメリカにおいて、ライフサイクル

研究の牽引車となったのは、世界的な家族社会学者ヒル(Hill, Reuben)であるが、人口学者グリックの貢献も顕著であった。

第二次大戦中、アメリカ政府は社会科学者を動員して、軍隊の統率と運用に必要な社会心理学的研究をさせた。その成果が *The American Soldier* の名で知られる四巻の報告書として結集され、戦後の社会学および社会心理学的調査の基礎を築いたことは有名である<sup>(2)</sup>。ストウフアー(Stouffer, Samuel)を団長とするこの調査団の一員であったグリックは、一九四四年、イタリアにおいて第五軍の後備で勤務していた。その前年ムッソリーニは失脚してイタリアでの戦闘は終わり、またドイツの敗色すでに濃いものがあった。それで、戦争が終わったら着手すべき研究のアイデアを、彼は同僚のローズ(Rose, Arnold)と幾晩もかけてノートに書きとめた。そのアイデアの一つが、家族のライフサイクルに基本的な変化が起こったと仮定したとき、変化のキーポイントを測る方法の開発にかかわるものであった<sup>(3)</sup>。

軍隊から復員して一年もたたないうちに書きあげたのが、*The family cycle* と題する論文であって、一九四

六年のアメリカ社会学会大会で報告し、翌年 *American Sociological Review* (12: 2) に掲載された(小山氏はこれに啓発されて前記の考察をまとめたのである)。この論文は一八九〇年と一九四〇年を比較して、一八九〇年頃までは、子どもが全部結婚しないうちにどちらかの親が死んだものだけれど、一九四〇年までに、子どもが全部結婚した後なお多分一一年間夫婦が生存するものとみてよい事態が生じていることを、明らかにした。イギリスについて同様の変化を指摘したミューダールたちよりも一〇年も早く、グリックがいわゆるエンプティネスト期の出現を指摘したのである。これは、やがて日本でも確認されることになる画期的な発見であった。

グリックは一八年後の一八九五年に発表した論文において、前の論文で一八九〇年と一九四〇年とを比較するため、に用いた資料操作の技法をカレンダー法とよび、この技法の不備を克服するべく開発した新しい技法をコウホート法と命名した。カレンダー法では、例えば一九四〇年のライフサイクルを計算するために、結婚年齢についてはその年に結婚した人々の平均年齢をとり、子ども数についてはその年に子どもを産み終わる年齢に達した女子の子ども数平

均をとる。これは今日の日本の官庁統計でふつうに用いられている技法である。しかし、結婚・出産・死亡のパターンの安定しておればこの技法でよいが、これらが変動している時代にはカレンダー法では問題があることはいうまでもない。やはり、女子の出生コウホート別に資料を組合わせないと正確を期することができない。このようにして、グリックは家族のライフサイクルと銘うった研究のなかから、コウホート法を出現させた。

他方、ヒルのライフサイクル研究は、コウホートに結びつく代わりに世代に結びついた。ここにいる世代とは、親・子・孫という親族関係を指す概念、つまり親族世代のことであって、彼の名著 *Family Development in Three Generations* (一九七〇) の表題にも掲げられている。同じライフサイクル研究といっても、グリックのほうはコウホートというキーワードを介して、ライフコースの研究に結合する契機があった。しかるにヒルは、個人を観察単位とするライフコース研究にたいし、家族研究者の立場から警戒心をもっていたのである。ここに両者の大きな相違点がある。コウホート法を用いたグリックの論文が発表された一九六五年、東京で第九回国際家族研究セミナーが開催さ

れ、「方法論的諸問題」のセッションでヒルが家族変動を把握する方法の一つとしてコウホート法に言及したが、このコウホート法は彼のライフサイクル研究と結合するものではなかったのである。

#### 四、コウホート概念の登場

グリックもヒルも、異なる文脈においてであるがコウホート法を論じた一九六五年、ライダー(Ryder, Norman B.)がコウホートにかんする画期的な論文 *The cohort as a concept in the study of social change* を *American Sociological Review* (30:6) に載せた。この論文はアメリカ社会学会の一九五九年大会で報告されたものの改訂版であるから、グリック、そしておそらくヒルも、ライダーの大会報告に啓発されてコウホート法を思いついたと推理されるのである。

ライダーの一九六五年論文で確立されたコウホートとは出生コウホートのことであって、彼自ら、同じ時間の幅のなかで生まれ、共に老いてゆく人々、とコウホートを定義している。<sup>(4)</sup> もちろん、ほぼ同じ時期に特定のシステムに加

わった人々を指す用法もある。例えば、同じ年に学校を卒業した人々、就職した人々、あるいは結婚した人々が、それである。同じ年に結婚した人々を結婚コウホートと呼ぶ。しかし、ライフコース研究では、とくにことわりがない限り、出生コウホートの意味でコウホートの語を用いる。

一九八六年にアメリカ社会学会会長をつとめたライリー(Riley, Matilda W.)は、*On the significance of age in sociology* と題する会長講演「一九八七」のなかで、ライダーの論文は世代を論じたマンハイム(Mannheim, Karl)の論文「一九二八」に匹敵するもの、と高く評価した。ライダー自身も、*generation* の語で *cohort* を意味した先例の代表にマンハイムを挙げている「一九六五」。コウホートの語で捉える対象は、マンハイムが世代 *Generation* の語で捉えたものと、文脈は同一ではないが、ほぼ同じといつてよいのである。

コウホートは一九四〇年コウホート、一九四一年コウホートなどと各年について呼称されるが、統計作成上五年、一〇年とまとめて、例えば一九六〇―一九六九年コウホートなどということがあり、また、もっと半端な数でまとめるこ



ともあろう。いずれにせよ、各年コウホートをかなり便宜的にまとめて分析する場合も、コウホートの語が用いられる。

これにたいし、各年コウホートを意味ある年数幅でまとめるとき、私は世代の語を復活させて用いたいと考えている。では、「意味ある年数」とはどんなことか。これにたいする回答の代わりに、別の機会に試みた暫定的な定義を繰り返すことにしよう。<sup>(5)</sup>すなわち、歴史的社会的属性のゆえに前後から識別された、接続する複数の各年コウホートをまとめて、世代というのである。一まとめにされた接続する複数の各年コウホートをかりに連続コウホートとよぶなら、連続コウホートのうち、「歴史的社会的属性のゆえに前後から識別された」ものが、世代である。これはマンハイムの世代概念にきわめて近い。ただ、一年単位で世代の厚みを決めることにより、世代の上限と下限を可能な限り明確にして、既存の統計に接合させ、また統計的处理をしやすくしようとするところに、マンハイムとの違いがある。そのようにみるなら、マンハイムの世代概念を実証的な研究に使いやすく操作化したもの、といえるかもしれない。他面、ライフコース研究がコウホートを手がかりとす

る理由の一つは、時代環境による歴史的規定性に注目するゆえであることを想起すれば、ここで定義したような世代こそ、ライフコース研究のより効果的な手がかりとなるはずである。

## 五、「世代」成立の要件

では、ライフコース研究の効果的な対象となるような、意味ある連続コウホートとしての世代は、日本ではいつごろどのようにして出現したのであろうか。世代もしくはコウホートの概念が登場して、研究資料の収集と分析を導くことになるかなり以前に、世代もしくはコウホートが実体として社会のなかに成立していなければならないのである。

先年亡くなった橋川文三という政治学者は、戦中派の戦争体験の意味を問うた評論活動で知られるが、早くから世代論に関心があり、幕末から明治維新にかけての政治過程の分析にマンハイムの世代概念を導入した。この動乱期の政治過程を担ったいわゆる志士たちは、単に下級軽輩の士族であつたばかりでなく、すぐれて世代的な現象がみられ

るといのである。橋川氏は、マンハイムによって初期体験の基礎形成に注目するとともに、世代状態・世代関連・世代統一の概念をマイハイムに学んで、つぎのようにいつている。

天保期以降の政治的危機の中で成長したすべての青年たちが一つの世代状態を構成し、一般に封建家臣団に所属する青年たちが一つの世代関連をなしたということができよう。そしてその内部において、たとえば薩長連合の担い手となった青年群と、旗本御家人の子弟や東北諸藩の青年たちとは、それぞれ別個の世代統一を実現したと考えることができよう。<sup>(7)</sup>

橋川氏はさらに進んでつぎのように議論を展開する。

たとえば伊藤博文、山県有朋、高杉晋作、井上馨、福沢諭吉らはいずれも天保五―一二年の間に生まれてゐるが、その他もおよそこの時期に生まれ、それ以降の内外の政治的危機を青少年期に刻印して成長したものと見ることができる。そしてそのような生活基礎財に対して、決定的な世代的「結晶化」<sup>(8)</sup>の契機となったものが、「黒船」<sup>(9)</sup>とともに「安政大獄」であったといえるであらう。

橋川氏の指摘に導かれて薩長土肥四藩出身の志士たちの生年を調べ、安政の大獄が始まった安政五年（一八五八）に元服年齢以上に達した者を、年長順に並べるとつぎのようになる。歴史に名を残した人たちのうち主な者に限ったが、大勢は判明するだろう。

#### ★薩摩藩

有馬	新七	三三歳（三七歳で斬死）
西郷	隆盛	三一歳（五〇歳で自刃）
伊地知正治		三〇歳
大久保利通		二八歳（四八歳で暗殺）
寺島	宗則	二六歳
海江田信義		二六歳
小松	带刀	二三歳（三五歳で病死）
松方	正義	二三歳
川村	純義	二二歳
村田	新八	二二歳（四一歳で戦死）
篠原	国幹	二二歳（四一歳で戦死）
桐野	利秋	二〇歳（三九歳で戦死）
黒田	清隆	一八歳
大山	巖	一六歳

西郷 従道 一五歳

★長州藩（○印は吉田松陰門下）

- 中谷 正亮 三〇歳（三四歳で病死）松陰の盟友  
杉 民治 三〇歳 松陰の実兄  
宍戸 磯 二九歳 松陰と同村  
吉田 松陰 二八歳（二九歳で刑死）  
広沢 真臣 二五歳（三八歳で暗殺）  
○木戸 孝允 二五歳（四四歳で病死）  
○前原 一誠 二四歳（四二歳で斬首）  
井上 馨 二三歳  
○入江 杉藏 二二歳（二七歳で自刃）  
○榎崎弥八郎 二二歳（二七歳で刑死）  
○山県 有朋 二〇歳  
○高杉 晋作 一九歳（二八歳で病死）  
○久坂 玄瑞 一八歳（二四歳で自刃）  
○伊藤 博文 一七歳  
○野村 靖 一六歳  
○品川弥二郎 一五歳  
○寺島忠三郎 一五歳（二二歳で自刃）

★土佐藩（○印は吉田東洋門下もしくはその感化を受けた者）

- 佐々木高行 二八歳  
寺林 左膳 二四歳  
○岩崎弥太郎 二四歳  
○福岡 孝弟 二三歳  
坂本 竜馬 二三歳（三二歳で暗殺）  
○板垣 退助 二二歳  
中岡慎太郎 二〇歳（二九歳で暗殺）  
○後藤象二郎 二〇歳

★佐賀藩（○印は枝吉神陽門下）

- 副島 種臣 三〇歳  
○大木 喬任 二六歳  
○江藤 新平 二四歳  
○大隈 重信 二〇歳

このリストを検討すると、薩長両藩には西郷隆盛・大久保利通、山県有朋・伊藤博文など下級軽輩の出で名をなした者が目立つが、薩摩の小松帯刀は家老であり、長州の中谷正亮・木戸孝允・榎崎弥八郎・高杉晋作などは上士の出であった。土佐では岩崎弥太郎・坂本竜馬・中岡慎太郎は

郷土や地下浪人の出であったが、板垣退助を始めとしてむしろ上土出身が目立っているし、佐賀では明らかな下級出身は江藤新平だけで、大隈重信などはれっきとした上士であった。このように、志士は決して下級士族の出ばかりではなかった。しかし、共通して若く、安政五年の時点では二〇代前半を中心としたようである。この点で、橋川氏の指摘は正しい。<sup>(10)</sup>

これらの志士たちは、脱藩して京都で活動するなど、藩を超える運動をしたが、各藩割拠の体制に規定されて、マンハイムいうところの世代統一はせいぜい各藩の内部でしか認められなかった。二つの藩をおおう世代統一たる薩長連合や薩土盟約の成立のためには、藩秩序の制約から比較的自由な出自と経歴の、坂本竜馬や中岡慎太郎の仲介を必要としたのである。その意味では、尊皇討幕を旗印とする全国的な世代統一はもとより、その前提としての全国的な世代連関も未成熟であった。これは幕末から維新期にかけての政治過程のなかで漸次成熟していったとしても、全人口の約五％を占めるにすぎない藩士や郷土層によって担われた運動では、全国的な世代連関の成立を問うこと自体、意味をなさないのではないだろうか。<sup>(11)</sup>

幕末Ⅱ維新期の政治過程を担った世代については、安政五年といった特定の時点でおさえてみると明らかなように、概して年齢幅が広く、藩によるそのヴァリエーションも見逃せない。年齢分布は長州の吉田松陰、土佐の吉田東洋、佐賀の枝吉神陽など、それぞれの藩で志士が師と仰いだ思想家の年齢によって左右されたようである。また、そのような思想家を結集の核として、各藩内での世代統一が成り立ったように考えられる。もし世代連関が、意味ある連続的コウホートとして、全国的にかつ全階層的規模で成立すべきものと考えらるなら、その出現のためには、明治維新を契機とする近代的な中央集権的国家の成立、およびその政府による制度的諸改革の実施をまたなければならなかった。

## 六、日本における「世代」成立要件の充足過程

世代関連成立の要件としての中央集権的政府による制度的諸改革とは何か。それは、従来地方によりまた職業階層によって区々の、年齢に結びついた公民的役割を一定のものとし、普遍的な国民の義務として法定することである。結論を先取りしていえば、全国民にたいして、一定年齢で

の就学を国民の義務と定めることである。男子については、職業階層のいかんを問わず、一定年齢での兵役を義務とすることも、同様の効果をもつ。

明治五年（一八七二）八月二日付け太政官布告第二一四号をもって発布された学制は、子弟が六歳になれば就学させるものと定めた（第二二条）。また、翌明治六年一月一日付けの太政官達によって布告された国民皆兵を標榜する徴兵令は、「全国ノ男子年齢十七歳ヨリ国民軍籍ニ入り」二十歳ニ至レハ兵役ニ就クヘキ」と定めた。

さて、これらの改革を厳格に実施するには、年齢の数え方を改訂しなければならない。なぜなら、従来の数え年では出生以後の経過年数の計算が不正確であったからである。そこに数え年に代えて満年齢を正式の年齢計算法として採用する必要がある。政府は徴兵令公布の翌月、二月五日付け太政官布告第三六号でこの改正を示達した（なお、わが国の暦制が太陰太陽暦から太陽暦に移行したのは、この年の一月一日のことであった）。

自今年齡ヲ計算候儀幾年幾月ト可相数事  
というのがその文言である。

明治五年に作製が開始された初の近代的戸籍・壬申戸籍

は、雛型から推測する限り最初数え年を記載したと考えられるが、これ以後満年齢を記載するようになった。新しい年齢計算方式は、戸籍以外の行政にも可能なものから漸次適用されていったのである。

徴兵令については、法改正により兵役免除の資格を大幅に制限して国民皆兵の原則の徹底が図られていく。また学校教育制度については、六歳から四年間子女を就学させる義務が明確にされていた。しかも、政府の行政指導のもとに小学校就学率が高まるにつれ、年齢によって全国民を輪切りにする一種の年齢階梯制を基礎として、コウホートが出現していく。<sup>(12)</sup>これは、従来の村落単位の年齢集団や村落内部の同輩集団<sup>(13)</sup>とは異なる、全国的な規模のものであった。明治末期には市町村単位で再組織された青年団の制度がこれに加わって、六歳で小学校に入り、高等小学校を卒業すれば青年団に加わり、成年と認められる二〇歳で兵役に就くという、年齢別に秩序だてられた全国民（ただし男子）一様の人生コースが成立したと考えられるのである。

こうして、小学校の一年毎の刻みに対応するコウホートが出現し、小学校で使用する教科書の性格、経済の好不況や戦争といった時代環境に規定されて、連続コウホートと

しての世代が登場する時代を迎えた。

昭和期においては、いわゆる十五年戦争、とりわけ総力戦となった第二次大戦末期の状況、敗戦直後の経済的逼迫と思想的混乱、高度経済成長期の広範な人口移動と顕著な高学歴化など、全国的全階層的な各年コウホートをさらに広い年齢幅にわたって発達させるとともに、連続コウホートとしての世代を浮彫りにする条件が重なった。こうして、アメリカ社会学の影響のもとに日本人によるライフコース研究が本格的に開始された一九八〇年代には、コウホート、そして世代が確かな実体として日本社会に聳え立ち、この研究の推進にふさわしい条件を創り出していたのである。国民皆兵の制度が昔日のものになったのに加えて、女子の高学歴化そして労働力化が進行した今日、かつて併立した男女二通りのコウホートの鮮やかな区分が、漸次希薄化するという様相を呈し、ライフコースおよび世代の研究に新たな地平を出現させている。そのことは、柴門ふみのコミック『同・級・生』が若い人々の間で熱狂的に読まれている最近の状況のなにも、影を落としているように思われるのである。<sup>(4)</sup>

#### 注

- (1) Elder, Glen H., Jr., 1977, "Family history and the life course," *Journal of Family History*, 2(4), p. 282.
- (2) Clausen, John A., 1989, "The American Soldier 40 years later," *Item* (Social Science Research Council), 43(3), pp. 71-73.
- (3) Glick, Paul C., 1988, "Fifty years of family demography: A record of social change," *Journal of Marriage and the Family*, 50(4), p. 863.
- (4) Ryder, Norman B., 1965, "The cohort as a concept in the study of social change," *American Sociological Review*, 30(6), p. 844.
- (5) 森岡清美「一九八九「死のコンボイ経験世代の戦後」日本社会学会大会での会長講演。
- (6) Mannheim, Karl, 1952, *Essays on the Sociology of Knowledge* (Translated and edited by Paul Kecskemeti). London: Routledge and Kegan Paul, pp. 302-304.
- (7) 『橋川文三著作集』四、一九八五、筑摩書房、二二三頁。
- (8) Mannheim, op cit., p. 310.
- (9) 『橋川文三著作集』四、二二六頁。

(10) 綿貫哲雄氏は豊富な資料によって維新の志士を論じたが、世代論の文脈での考察ではなかった。綿貫、一九七四、「維新と革命」二（政治の貧困）、第一章革命家（大田堂）参照。

(11) 明治六年調戸籍表、明治七年調戸籍表（外岡茂十郎編、一九六七、『明治前期家族法資料』第一巻第一冊、早稲田大学、二六七～二六八頁、三二二～三二三頁）。

(12) ライダーは、一年ずつ進む年齢階梯制の学校こそ a cohort creator だと云っている（Ryder, op cit., p. 354）。

(13) 地方により、ツレ、ドウシ、ホーバイなどとよばれる。竹田旦、一九八九、『兄弟分の民俗』人文書院、をみよ。

(14) 藤竹曉、一九八九、『同・級・生』感覚で生きる』『書斎の窓』（有斐閣）No. 三九〇、四六一～五一頁。

〔付記〕 本稿は中央大学文学部社会学会設立記念公開講演（一九八九・一二・八）の原稿に加筆したものである。講演の記録は、中央大学田野崎昭夫教授のご配慮により、「ライフサイクルからライフコースへ」と題する小冊子にまとめられている。

#### 〔追記〕

一九九〇年三月二六日、松本通晴教授のご斡旋により、同志社大学人文科学研究所の研究会に招かれ、この原稿に依拠して報告したところ、有益なコメントを参会者から頂戴した。その一、二を摘記しておく。コウホートが統計的概念として顕著な有効性をもつようになってきたことは承認できるが、そのことがただちに社会的実体としてのコウホートの成立と考えてよいかどうかは議論の余地のあるところであり、いわんやここでいう意味での世代の成立を一義的に保証するとはいいたいのではないか、との指摘。世代に対応して人間類型をとらえようとする筆者の試みにたいして、経済的基盤によって人間類型を把握する従来手法が依然としてより有効ではないか、との指摘がそれである。筆者は、これらの指摘が含む問題提起を受け止めて、より高次の議論を組み立てたいと考えている。

（一九九〇・六・一）